

大唐三藏物語

西域伝

下



集英社

域伝
下

朗



西域伝——大唐三蔵物語 下巻

一九八七年十二月二〇日 第一刷発行
一九八八年二月二九日 第二刷発行

定価 九八〇円

著者 伴野 朗

装丁者 原田維夫

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一

出版部 (〇三)二三〇一六一〇〇
販売部 (〇三)二三〇一六一七一

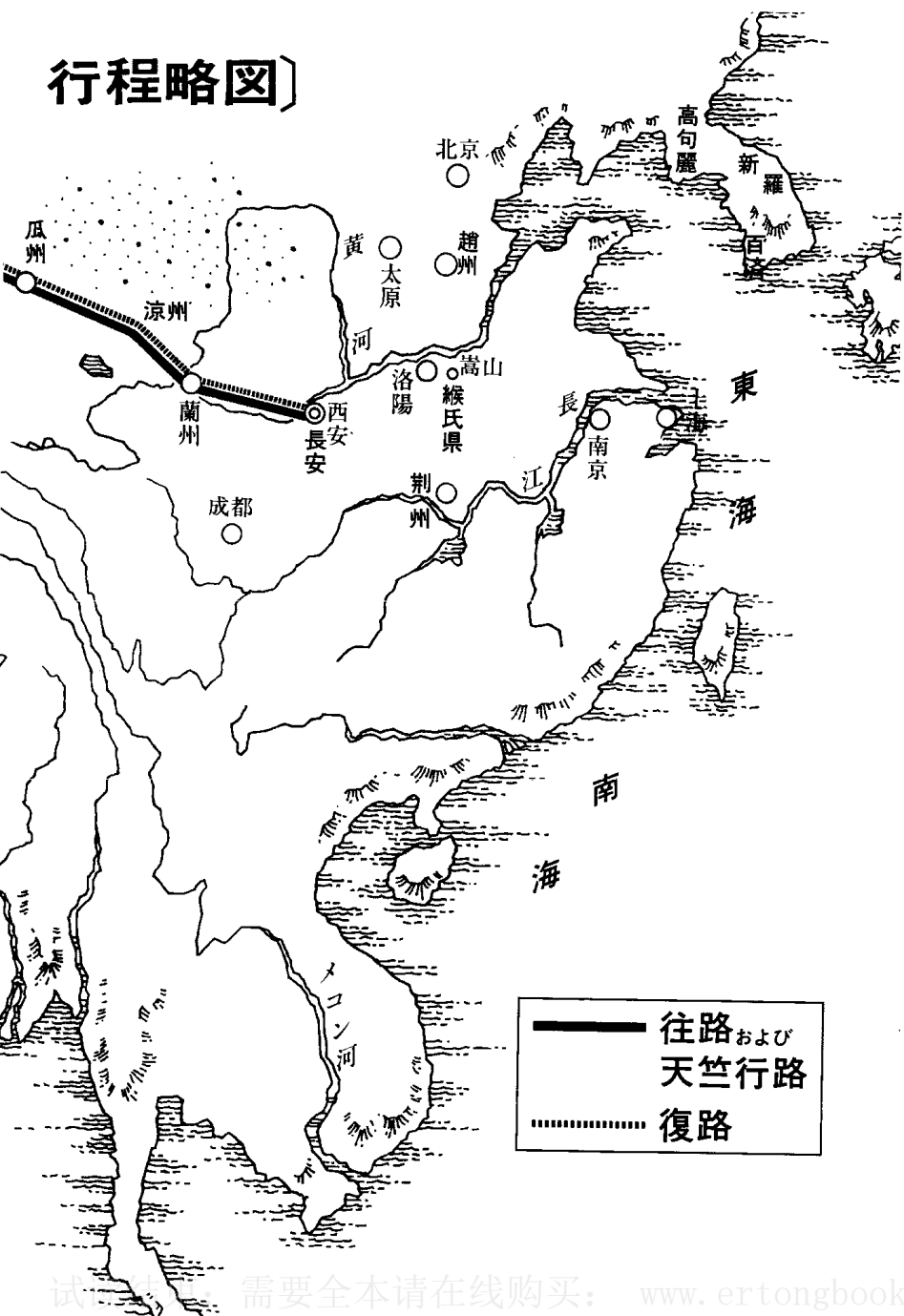
製作課 (〇三)二三〇一六〇八〇
印刷所 凸版印刷株式会社
検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

目次 (下卷)

エ ピ ロ ー グ	三 蔵	昇 華	天 竺	雷 神	選 返	氷 河	火 焰	砂 漠	犧 牲	難 関 (承前)
259	238	210	177	145	118	93	73	49	22	7

行程略図



地図

さがら常廣

西域伝

— 大唐三蔵物語

下卷

3

玄奘は、涼州都督府で李大亮と相對していた。

「そなたの高名は、それがしもよく存じておる」

李大亮は、まずそう切り出した。玄奘は、澄んだ眼でじつと涼州都督の顔を見詰めている。

「正直に答えて貰いたい。よいか、法師殿——」

「はい」

玄奘は、まったく屈託がない。

「これより、いづくに参られるおつもりか？」

「求法のため、天竺に参ります——」

きっぱりと、彼はいった。

「天竺へ……。わが国は私的な出国を禁じておる。そのことは承知か？」

「はい、存じております」

「では、いかなる手續を経て、出国の許可をとられたのか？」

「再三出国の許可を求める願書を出しましたが、お取り下げ下さいませんでした。故に許可は受けておりませんが、これは仏法のためです。苦しみ、悩める衆生を救わんがための求法でございます」

玄奘は、力強くそういい切った。

「仏法のためとはいえ、それでは国禁を犯すことになるぞ」

李大亮は、初めて少しだけ声を荒げた。

「やむを得ない、と思っております」

「玄奘殿、それがしのもとに、そなたを見つけ次第、捕えて身柄を長安に送り返せ、という長安からの連絡が入っております」

「じゃが、それがしは、そなたに縄を打ちたくはない。ここは一つ聞き分けて、自分から長安に戻ってはくれまいか」

「ありがたいお言葉ではありますが、私はどうしても天竺に参る覚悟でおります」

「そうなれば、縄を打つことになるぞ」

「いたしかたありません」

「きょうのところは、このくらいにしておこう。二、三日よく考えてくれぬか。そなたほどの人物なら、この道理はよくわかる筈だがのう」

李大亮は、毛定が嫌いであった。玄奘の逮捕に積極的でない理由が、それであった。

李大亮は、京兆涇陽の人。高祖に仕えて武功をたて、交州刺史から涼州都督に転じた。

以前に、彼の部下に毛定の甥に当たる男がおり、その処遇をめぐって、宦官一流の陰險な報復を受けたことがあった。それに彼自身、どちらかというところ、武人タイプであり、宮廷政治に権謀術数を駆使する毛定ら宦官グループとは、まったく違った肌合いの人物であった。

また仏教に深く帰依しており、玄奘に心情的には同情

していた。さりとて、太宗側近の毛定に正面切って楯を突くこともできない立場にあった。

——なんとか、よい思案はないものか？

玄奘を帰したあと、李大亮は自室にこもって、そのことを考えていた。

どう理由があっても、都督たる者が、国禁を犯す行為をみすみす見逃すわけにもいかない。

——玄奘をなんとか思いとどまらすことはできないだろうか。

茶を喫してから、彼は腕を組み直した。当然のことだが、この件で自分が怪我をするつもりはない。

——なにかよい考えはないものか。

彼は、思案にくれていた。

「どうじゃ。引き受けてくれるか——」

そういったのは、黄鬼である。涼州の場末の一杯呑み屋である。豚の足を齧っていた男が、床へ骨だけになった足を放り投げた。漢人ではない。明らかに胡人である。紫髯碧眼、大柄でガッシリした躰つきをしていた。黄鬼と遜色のない体格である。

「のう、石槃陀。昔のよしみじゃ。やってくれよ」

黄鬼は、石槃陀と呼んだ男の湯呑みに、なみなみと酒を注いだ。

石姓を名乗るところをみると、石国の出身であろうか。石国とは、いまのソ連のウズベク共和国の首都タシケント一帯である。アーリヤ系の民族が住んでいた。

「その坊主を叩き殺せばよいのか？」

石槃陀は、無雑作にいった。手には、新しい豚の足を持っている。

「やってくれるか！」

「条件が一つある——」

「なんだ。いってみろ」

「俺にも、奴の肉を食わせるのだ」

「——」

「どうした、黄鬼道人——」

石国人は、からかうようにいった。黄鬼は返答に窮していたが、前の湯呑みの酒を一気に干してからいった。

「そこまでわかつているなら仕方がない。お前の条件を呑もう」

「ほう、承知したか。で、その坊主にどんな利益がある？」

「生まれた時、仏の子といわれた。不老長生間違いない

じゃよ」

「なるほど」

「当時は、居士さまも随分とご執心であつたげな」

「ほう、居士さまがな」

「いま、長安で『釈門の千里の駒』とうたわれておる」

「食い甲斐がありそうじゃな……」

「バカ。いまから涎をたらすでない」

「ははは……。ついその気になつてしまつたわい」

「で、手筈は？」

「まあ、俺に任せておけ。それよりも、きょう長安から都督府に急使が届いた」

「やはり、長安からの急使か」

「知つておつたか」

「わしらの前を駆け抜けていきよつたわ。で、なんの知らせじゃ」

「その坊主を見つげ次第、引くくつて長安に送れといつてきたそうな」

「相変らずの早耳じゃが、それはちと困つたのう」

「その心配は、少林寺の坊主どもにさせておけばよいわ

奴らがなんとか手を打つてあろうよ」

石槃陀が、豚の足の肉を食いちぎりながらいった。

この男、鬼道門にかつていたことがある。青鬼と同格だったから、黄鬼は弟子ということになる。大男のくせに蝶のような軽やかな身のこなしをする。闇のなかでも、眼が利くという特技の持主でもある。

「さあ、もう一杯、ぐつとあけてくれ——」

黄鬼が、なみなみと注ぎ足した白酒を、石槃陀は、水のように呑み干した。

彼らが話している後ろの席で、一人で杯を傾けている隻腕の男がいることに、二人はまったく気づいていなかった。

黄鬼道人と、その連れの石国人、石槃陀が去ってから、その隻腕の男は、居酒屋の固い樽の上に腰をおろしたままだった。

——斬るか。

男は、口のなかでそう呟いた。李翔である。早馬を飛ばして、玄奘たちよりも一足先に涼州に入った。だが、本来の目的である涼州都督府を訪れることなく、街に出ていた。長安から来た高僧の噂を聞くためである。玄奘が涼州に着いたことはすぐにわかった。だが、いまだここにいるかがわからなかった。最後に足を入れた場末の居

酒屋で、彼は容易ならざる陰謀を耳にしたのだった。

二人が話題にしていたのが、玄奘であることは間違いなかった。智相に聞いた、

——釈門の千里の駒。

という表現が使われていた。

——玄奘の命にかかわるかも知れぬ、という智相の予感はは当たったことになる。

彼は、杯に残った白酒を、喉に流し込んだ。とにかく間に合った。玄奘の無事を確認することが、まず第一だ。あの二人は、必ず玄奘を襲うに違いない。

鳥目ちやうりを台の上に置くと、李翔は立ち上った。玄奘と浴陽で会ったのが、ついきのうのことのように思われた。

漆黒の闇が、辺りを包んでいた。

大雲寺は、闇のなかにひっそりと建っていた。暗闇のなかで声が出た。

「この暗きでは、霧はいるまい——」

音程のはずれた声は、黄鬼のものであった。

「不要じゃ」

短くそっくり切ったのは、石槃陀である。

「塀を乗り越えねばならんぞ。手を貸してやろう」

黄鬼は、そういうと、手を組んでその上に石槃陀の足を乗せた。石槃陀が、伸び上った。手は、塀の屋根に届かない。

「もつと持ち上げてくれい」

「わかった——」

黄鬼が力んだ。たいした力である。巨漢の石槃陀の躰をじりじりと持ち上げていく。

「よし、手が届いたぞ！」

石槃陀が、そう声を出した時だった。

「覚悟しろ、化物ども！」

どこからともなく、低い声が出た。

「なにやつ？」

黄鬼が、闇を凝視した。身近にかすかではあるが、人の気配がした。それまで、気配を消していたのだ。戦慄が、黄鬼の全身を走った。その一事だけで容易ならざる敵であることがわかる。いま斬り込まれたら、彼には防術がない。両手は、石槃陀を乗せて自由が利かない。

石槃陀も、一瞬にして不利な状況を読み取っていた。

ここは、黄鬼の両手を自由にしてやるしかない。彼は、黄鬼の組んだ掌を蹴ると、塀の屋根の上に立った。

その時だった。白刃が電光のように黄鬼を襲って来た

のは。間一髪のところ、黄鬼は闇のなかから送り出されてきた必殺の先制攻撃を躲した。頬に冷たい感触があった。皮膚の一部を斬り裂かれたらしいが、そんなことに構っている暇はなかった。

すぐさま、二の太刀が襲って来た。恐ろしく正確な軌道を描いて、鋼の凶器が彼の頭上に迫った。反転したが、遅かった。右腕をしたたかに斬られた。

「うぬ！」

黄鬼は、なんとか有利な姿勢を確保しようとした。それができれば、霧を呼ぶことができる。そうすれば、霧にまぎれてこの窮地から脱することも不可能ではない。

だが、襲撃者は、その余裕を与えてくれなかった。三の太刀は、誤らず彼の頭に振りおろされていた。辛うじて彼は、避けた。ただ、左耳を削ぎ取られ、鮮血が吹き出していた。

彼は、構わず反転した。何万分の之一的の逆転の可能性を、彼はまだ考えていた。

だが、それは彼の考えだけで終わった。次に襲ってきた白刃は、彼の生命力を奪うに十分な一撃を、その首筋に加えていた。

「——」

声とも、悲鳴ともつかぬ声が、黄鬼の口から絞り出された。

——いかん。相手は手強い。ここは姿を消す方が上策じゃ。

塀の上で、石槃陀は、情勢をそう判断した。彼は巨体に似合わぬ素早さで、塀の上を走った。物音一つたてない軽やかな身のこなしであった。

その姿は、あつという間に、闇のなかに呑み込まれていった。

「一匹は仕止めたが、もう一匹には逃げられたわい……」
そう独りごちたのは、李翔だった。左手には黄鬼の血をたっぷりと吸った剣をさげたままである。

足元には、完全に事切れた黄鬼道人の死体が転がっていた。

李翔は、死体には一瞥もくれず、足早に歩き出した。静寂に戻った。漆黒の闇は、なにこともなかったかのよう静かに広がっていた。

4

玄奘が西へ向って旅立ってから、曇宗は寄宿先の興福

寺の自室に籠り切りであった。志操にいった通り、鬼道居士を封じ込める雷神の護符をいかに使うかの工夫を練りに練っているのだ。

だが、なんとしてもうまい工夫がつかないのだ。

——なんとかせねばならぬのだが……。

焦りが出てくると、思考は集中力を欠いた。

部屋にこもって三日目の夜明けであった。彼は疲労のあまりうとうととした。

それは、夢であるのか、幻であるのか、さだかでない。つた。

——あつ、お師匠さま。

彼は、道教時代の恩師、虚快きょくがい元君げんくんの姿を見たのだった。

元君の姿は、一定しなかった。影のようにゆらめきながら、縮んだり、伸びたりしている。

——史栄よ。

かつての師は、彼を当時の俗名で呼んだ。

——はい、お師匠さま。

——光じゃよ。

——はっ？

——光を当てて、影を見るのじゃ。

元君の姿が次第に薄くなっていった。

——お師匠さま！

そう叫んだ自分の声で、眼が覚めた。

——光を当てて、影を見るのじゃ。

元君の最後の声だけが、耳のなかに残っていた。あと
の幻覚は、日向に置かれた氷のようにすつと溶けて消え
ていた。

——光を当てて、影を見る。

彼は、その言葉をもう一度口のなかで呟いた。なにか
が、頭のなかで弾けるのを感じた。

——光を当てて、影を見る……。

一つの考えが、次第に形を整えてきた。

——そうか。鬼道居士の影を見極めることか！

彼は、いまはなき恩師の霊に感謝した。虚快元君の霊
魂が、自分の仇を討つよう啓示を与えてくれたのだ、と
彼は信じた。

曇宗は、眼を閉じた。睡眠不足で疲れている筈なのに、
気分は爽快であった。腹の底からなんともいえぬ緊張感
が湧いてくるのを、彼は意識した。

——鬼道居士を倒す。

それは、確固たる意志となつて、彼の脳細胞を支配し
ていた。

——きょう、決着をつけてやる。

曇宗は、いつにない闘志を燃やしている自分を意識し
ていた。

「要は、どうやって、居士を誘い出すかでありますな」
腕組みしたままで、志操がいった。曇宗は、黙ったま
ま頷いた。

「なにか策はございますか？」

「お主に一役買って貰いたい」

「私に？」

「そうだ。玄奘の後を追つて西へ向つた異形の男、じくしち
兇の話からすると、黄鬼道人に間違いない」

「私も、そう思います」

「お主、鬼道居士を訪ね、西から戻つたばかりの男が黄
鬼道人とやらいう人の言付けを持つておる。屋敷の脇に
待たせているので同道して欲しい、と申すのじゃ」

「居士め、引つ掛けて参りましょうか？」

志操は、はなはだ自信なげにいった。

「うまくやってもらわねば困るな」

「どうも、私は芝居気がありませんで……」

「そこをなんとかうまくやるのだ」

「わかりました……」

それから一刻後、志操は、布政坊の宇文士及の屋敷の前に立っていた。彼は一つ深呼吸してから、屋敷の門を潜った。

「黄鬼からの言付けを持った使い？」

鬼道居士が、眉をひそめた。

「どんな僧か？」

「筋骨逞しい男です」

使いの者という男と応対した青鬼道人が答えた。

「私が参りましょうか？」

赤鬼道人が、居士の顔色を窺いながらいった。

「いや、待て。あののんき者の黄鬼が言付けをいって寄

こすとはのう……」

居士は、しばらく眼を閉じて、なにごとかに精神を集
中していた。

「見えましたか？」

と、赤鬼が訊いた。居士得意の透視の術である。

「いや見えぬ。なにも見えぬわ……」

「なにか、黄鬼の身に？」

「わからぬ。だが、気になるのう……」

彼は、再び精神統一をはかった。今度は、かなり長い時間がかかった。

「見えたわ……」

居士が、低い絞り出すような声でいった。

「黄鬼め、どういたしております？」

と、青鬼。

「奴は、斬られた。死んでおる……」

「黄鬼が、でございますか！」

二人が、同時に叫んだ。

「間違ひなく死んでおる。斬ったのは、隻腕の劍士……」

「過ぐる年、この長安の廢寺に紛れ込んだ男ですか？」

李翔と争ったことのある青鬼が訊いた。

「あるいはな……」

「黄鬼め、なにをいっただいってきたのでございませう？」

と、赤鬼。

「気になるのう、そのことが……」

居士は、意を決したようにいった。

「会ってやろう、その男に」

「取り次ぎが、仏教僧というのが気になります。私がお供を——」